

桂宮西ノ墓地ほか土塀改築その他工事に伴う立会調査

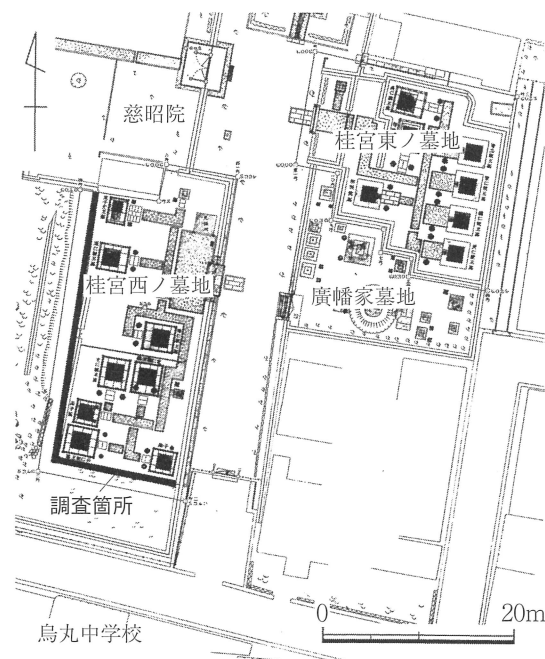
桂宮西ノ墓地は京都市上京区相国寺門前町相国寺内に所在し、相国寺の塔頭である慈照院の門前に位置する。域内には八基の宝篋印塔などが林立し、なかには高さ3mを超える大型のものもある。なお、慈照院の参道をはさんで東側には桂宮東ノ墓地および廣幡家墓地が所在している。

今回の調査は本墓地を囲む南側・西側の土塀が経年によって著しく損傷し、倒壊の恐れがあることから、既存の土塀を撤去し、新規に鉄筋コンクリート塀に改築されることになったためおこなったものである。当初は月輪陵墓監区事務所による立会調査をおこなっていたが、掘削時に石列が検出されたため、急遽、本部職員が立ち会うこととなった。本部職員による立会調査は平成20年1月8日～11日の計4日間実施し、その他の期間は適宜、月輪陵墓監区事務所職員が立ち会った。

調査箇所は塀の改築箇所となるため、幅約1mのトレンチを西側では南北に長さ約29m、南側では東西に長さ約15m設定し、掘削をおこなった(第14図)。基本層序は以下の通りである。

- I層 表土。砂利多く含む。竹の根多い。
- II層 雨落ち溝埋土。暗茶色土層。しまりややなし。砂利、瓦片など多く含む。
- III層 石列の裏込め土。茶褐色土層。小石、土師器片含む。しまりややなし。
- IV層 褐色土層。粘性ややあり。非常に堅い。江戸時代の土師器片含む。上面が石列設置時の整地面。
- V層 黒褐色粘質土層。非常に堅く、しまりあり。本墓地造営時の造成土か。
- VI層 茶褐色粘質土層。黄色粒、炭など含む。

南側の掘削箇所では全面で雨落ち溝と考えられる落ち込みを検出し、中央付近で東西に延びる石列を検出した(第15図)。この石列にもちいられている石材は基本的に花崗岩で、石材の平坦な面が南側を向くように配されており、南側が露出するような石組みであったものと考えられる。この石列は約4m残存しており、西側でその続きを確認することはできなかった。東側も同様であるが、もっとも東側(現在の東側土塀基礎下)で一石だけこの石列の続きと思われる石材が確認できる(第14図南側掘削箇所東壁土層断面図)。この断面図によればII層とした雨落ち溝と思われる溝状の遺構が複数確認でき、本墓地を画する塀が何度か改築されていることが推測される。この石列の設置時期については、断ち割りをおこなった際に石列設置時の掘方に切られている土層内(IV層)から江戸時代の土師器や陶器の細片が出土していることから、江戸時代以降と考えられる。また、断ち割りの結果、この石列にともなう裏込め石や胴木などは確認されなかった。この石列の性格については、先にも述べたように雨落ち溝が複数確認されていることから、どの雨落ち溝に対応するのかわからないが、本墓地を区画する土塀の基礎が一部分だけ偶然残存したのと考えられる。

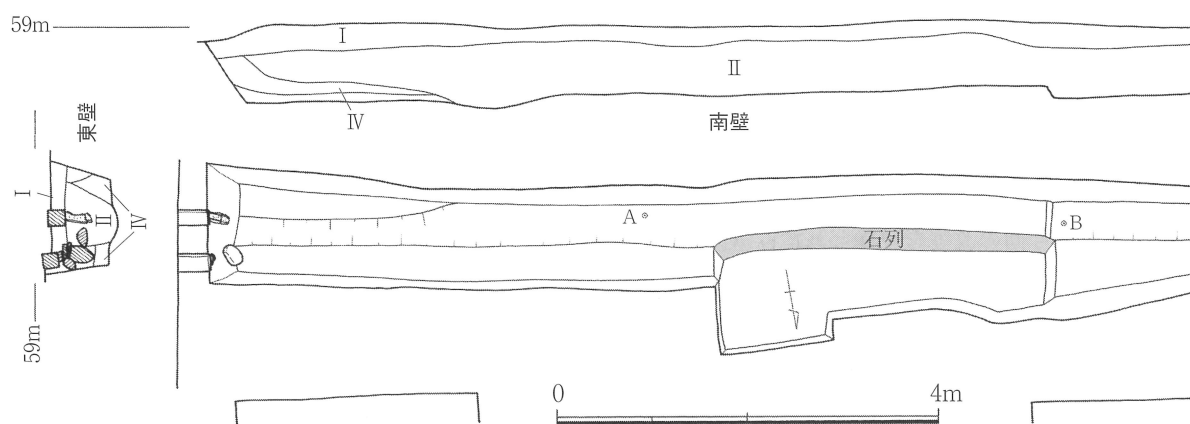


西側の掘削箇所の様相も、基本的には南側の掘削箇所と変わらないが⁽¹⁾、IV層の下にV層、VI層を確認した(第15図)。V層はIV層よりも下層であることから、江戸時代あるいはそれ以前に形成された土層であることが明らかであるが、しまりがあり非常に堅いのが特徴であり、近隣ではみられない土質である⁽²⁾。本墓地は霊元天皇皇子文仁親王墓がその端緒となるようで、その薨去年は1711(宝永8)年である。V層はおそらくこの時期に本墓地が造成された際の造成土ではないかと考えられる。

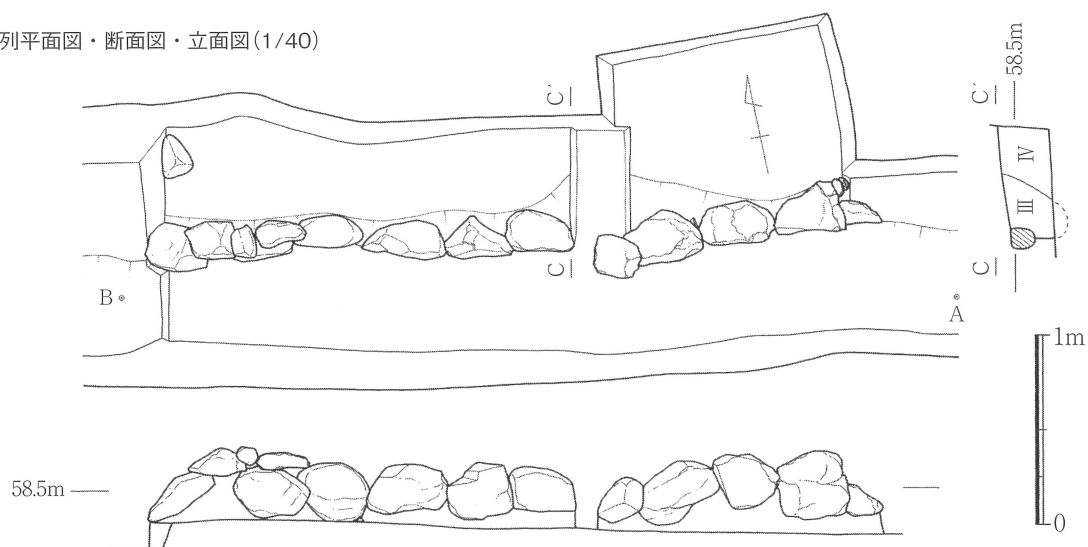
上述したとおり、今回の掘削箇所では土塀の基礎と推測される石列および土塀に対応する雨落ち溝が確認された。

第14図 桂宮西ノ墓地 調査位置図 (1/800)

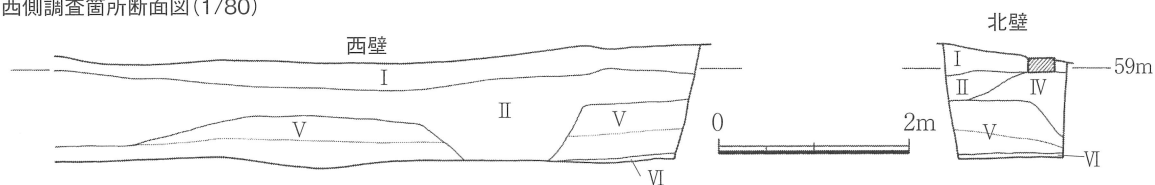
・南調査箇所平面図・断面図(1/80)



・石列平面図・断面図・立面図(1/40)



・西側調査箇所断面図(1/80)



第 15 図 桂宮西ノ墓地 平面図・断面図・立面図

これらはいずれも江戸時代以降のものと考えられる。こうした結果をふまえて、現地において京都市と協議した結果、今回検出された遺構は戦国時代に遡るものではないことから記録保存とすることとし、工事は予定通り施工された。(加藤一郎)

註

- (1) 西側の掘削箇所におけるⅡ層内からは、江戸時代の瓦に混じって戦国期に遡る可能性のある本瓦片が出土しており、隣接する慈照院との関連が推測される。
- (2) 調査中には京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の馬瀬智光氏からご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。



1 深草北陵 南北トレンチ 西壁



2 深草北陵 東西トレンチ 北壁



3 阿保親王墓 西トレンチ



4 桂宮西ノ墓地 石列（西から）